

鑑賞者

鑑賞者

鑑賞者

加藤 立

with

勝谷 涼子

木下 ふうか

クレゴン太

野田 ひまわり

みやたに

第24回岡本太郎現代芸術賞展

2021.2.20(SAT)~4.11(SUN)

川崎市岡本太郎美術館

TARO OKAMOTO MUSEUM OF ART,KAWASAKI

〒214-0032 川崎市多摩区桙形7-1-5

<http://www.taromuseum.jp>

RYU KATO

B E H O L D E R

with

RYOKO KATSUYA

FUKA KINOSITA

KUREGONTA

HIMAWARI NODA

MIYATANI

「鑑賞者」

パフォーマンス

スケジュール

勝谷 涼子	加藤 立	木下 ふうか	クレゴン太	野田 ひまわり	みやたに
----------	---------	-----------	-------	------------	------

2/20 (土)	●	●	●	●	●
2/21 (日)	●	●	●	●	▲
2/27 (土)			●	●	●
2/28 (日)			●	●	●
3/6 (土)		●	●	●	●
3/7 (日)	●	●			●
3/13 (土)	●	●	●	●	●
3/14 (日)	●	●			●
3/20 (土)		●	●	●	●
3/21 (日)	●	●	●	●	●
3/27 (土)	●			●	▲
3/28 (日)	●	●	●	●	▲
4/3 (土)			●	●	●
4/4 (日)	●	●			▲
4/10 (土)	●	●	●	●	▲
4/11 (日)	●	●	●	●	▲

● 参加

▲ 未定

*パフォーマンスは展覧会期間中の土曜日と日曜日の13:00~17:00に行います。(平日はパフォーマンスの記録映像を観ることができます。)
*パフォーマーが背負っている絵画の内容についてのご質問は、直接パフォーマー自身にお尋ねください。
*パフォーマーがお休みの日はそのパフォーマーが背負う絵画を観ることはできません。

われわれ鑑賞者は背中に一枚の絵画を背負ってアートの森を飛びまわるミツバチだ

パフォーマンス作品「鑑賞者」では、パフォーマーは鑑賞者の役を演じる。パフォーマーは一般的な鑑賞者と同じように、展示してある作品を鑑賞してまわるが、その背中には常に一枚の絵画を背負っている。

- 1 この絵画は、オリジナルを忠実に再現した模写（複製画）である。
- 2 この絵画は、これを持ち歩く当人がかつてどこかで観た絵画である。
- 3 この絵画は、これを持ち歩く当人が背負って歩いている間だけ、その他の人々に鑑賞される。

その絵画は人間が背負い歩いているので、落ち着いて鑑賞することが難しい。じっとしていないし、光の当たり方もその時々だ。でも、いま私が観たいのは、そういったタイプの、観る側と観られる側が呼吸を合わせる必要がある、そういう絵画である。

という風に私は応募プランに書いたわけだが、いったいどうしてこの「鑑賞者」たちは背中に絵画を背負っているのだろうか、という問い合わせが当然でてくるし、もちろんその問い合わせは、なぜ私がこのようなパフォーマンス作品を思いついたのかということにも密接に関わってくるのでそれについて話さないわけにはいかない。

これまでに描かれたすべての絵画は公共の富である、というのが今のところの私の答えである。絵画や彫刻など、「アート」と総称されるものは、水や食物や電気などとは違って、人間の生存には直接必要なもの、などと言われることも多々あるが、アートが枯渇してしまえばどのような社会になっていくかということはさまざまな歴史に刻まれているとおりだ。

そして、水や食物や電気などが公共の富であり、一部の人間が独占してはならないのと同じで、アート作品も公共の富である。

われわれ鑑賞者は、美術館などで様々な作品を目撃し、記憶にとどめ、それを持ち帰る。そのようにして自分たちの生活の中で様々な形でその記憶を抱えながらその先の人生を生きていくという一連の行為が鑑賞であり、芸術である。

バッハの曲やシェイクスピアの物語と同じようにあなたはあなたに必要な絵画を常に持っている。

作品とは鏡だから、自分自身の姿だけでなく、様々な者たちが映り込む。その鏡を持ち帰ってそこに映り込む者たちを自身の生活の中に反射させることができる、という意味で作品鑑賞とは主に美術館やギャラリーの外で起きている。

鑑賞をあなたと作品との間だけに閉じ込めてはいけない。

かつて私は「アート」とは「作品」のことではない、と言い、「アート」をひとつの森に例えた。

アートというのは、実は、アーティストがつくってきたのではなく、鑑賞者がつくれてきた、のではないでしょうか。

「作品」をつくるのはアーティストですが、「アート」は作品のことではなく、作品が鑑賞者の中に入り込み、そこでもくもくと成長し、その後、そのひとりの鑑賞者から隣の人へ、また隣の人へと次々と感染し、もともとの作家の思惑を大きく超えて、自立して進んで行く、その過程のことなのではないでしょうか。

例えば、その過程を植物の生成過程に例えてみましょう。アーティストは、自分の身近な生活の中から、将来大きく芽吹いていきそうなタネを探し出します。そして、そのタネとなるだけ良い土壌の畑の中に埋めます。うまくいけば芽が出て育ち、一本の木となります。さらにうまくいけばその木からおいしい果実を採集し、さらに隣の畑にその果実のタネを植え、すこしづつその果実となる木を増やしていきます。ここまででは作家と作品の関係です。

しかし、私の考えではアートは一本の木ではなく、森であります。

果実のなった木に、鳥や昆虫などが群がり、そのおいしい果実を食り、その食べ散らかしたタネが、知らない間に荒野にばとんと落ち、そしてまた知らない間にそのタネが芽をだします。そのようにして、誰も知らない間に一本の木の果実が様々な場所で芽を出し、いつの間にかあたりは鬱蒼とした森になっています。ひとりの百姓の手ではコントロールできなくなり、森は森として、鳥や動物や、昆虫や、はたまた世を捨てた人間の住処となります。セザンヌの森やピカソの森やウォーホルの森やマイケル・アッシャーの森は、ひとつの生態系となり、今日も様々な生き物がそこを住処とし、そこから採れる果実を食べて暮らしています。

一本の格好の良い木に対しては、鑑賞者は少し離れた場所からその姿をカメラに写します。

鬱蒼とした森に対しては、鑑賞者はその中に入って行く以外にありません。

加藤 立 「挾啓マイケル・アッシャー」より

われわれ鑑賞者は背中に一枚の絵画を背負ってアートの森を飛びまわるミツバチだ。この森のどこかに、あなたが生きていく上で必要な果実がなっている。その果実は誰が食べてもいい、いくら食べてもなくなるない、そのような魔法の果実なのだ。

加藤 立

鑑賞者紹介



勝谷 涼子
RYOKO KATSUYA



加藤 立
RYU KATO



木下 ふうか
FUKA KINOSITA



クレゴン太
KUREGONTA



野田 ひまわり
HIMAWARI NODA



みやたに
MIYATANI

1992年 鹿児島県出身、東京都在住。

2016年 横浜国大大学教育人間科学部卒業。

2020年 劇団青年座研究所卒業。

今井純氏のもとで即興芝居を学ぶ。英語で舞台を上演するほか、即興演劇チーム「ミコカクマ」を結成し、60分間の即興芝居に取り組む。

1979年 愛知県生まれ、東京都在住。

2003年 東京藝術大学建築科卒業。

近年の出展、受賞に、2020年「遠い

時間・近い時間 -Akid 加藤立 小林

エリカ」2019年「ゲンビビコでも企

画公募」2018年「六本木アートナ

イト」。近年は自身の身体を使ったパフ

ォーマン型の作品を発表。

www.ryukato.com

東京都在住。

日本最大級のきものコンテスト「きものクイーンコンテスト2017」入賞後、フィギュアスケート表形式、アルペンスキーウールドカップ表形式のプレゼンターなどを経験。2019年には新潟県越後湯沢觀光大使「第57代ミス駒子」に認定、現在ドラマ、CMなどマルチに活動中。趣味は茶道、旅、絵画鑑賞。

京都府出身。3兄弟の長男。

5歳の時にジャッキーチェンの映画を観たことがきっかけで空手道を始める。空手の選手を引退後、5歳から好きだった映画の世界を夢見て上京。冷泉公裕、出口典雄の元で芝居を学び、現在フリーで活動中。昨年主演作品「濡れたカナリヤたち」がカナザワ映画祭に入选。柄木県交通安全のCMに出演中。

1997年生まれ、埼玉県出身。

2020年洗足学園音楽大学ミュージカルコース卒業。幼少期に市民参加型ミュージカルで初舞台を踏み、以降舞台を中心で活動。近年は舞台芸術からインスタレーションに興味を持ち、ギャラリーでの公演など美術との関わりを模索している。

東京都在住。2018年ビジネスマンのままコメディ劇団 SHOW&GO FESTIVAL

に見習いで入团し、初舞台。

2019年から今泉力哉『his』、飯塚俊

光『踊ってミタ』を皮切りに映像作

品にも参加。澤佳一郎『アリストの住

人』、天野裕允『劇場版ほん怖2020』、

松本勤『パレット』等ではメインキ

ャストを務める。

ボビー中西氏・園田新氏に師事。

自称 artist として平面・立体を自宅壁面に展示。東京都アートにエールを！制作集団みやたに】

<https://cheerforart.jp/detail/1238>